

セックスと愛と携帯電話 — バンコクのゴーゴーバーから展望するタイ社会の一断面 —

Sex, love and mobile phone
— A cross section of Thai society viewed through Bangkok go-go bars —

市野沢 潤平*
Jumpei ICHINOSAWA

The aim of this paper is to portrait a cross section of changing Thai society, which is reflected in one of the most famous and large segments of Thai tourism-oriented sex industry, namely, go-go bars in Bangkok. The author's extensive one-year participatory fieldwork yielded certain findings on bar girl - customer relations in the bar scene and those findings provided the empirical basis of this paper.

In most studies of Thai prostitution, the explanation for flourish of sex industry in Thailand has been sought in the socioeconomic environment of the country, namely, existence of strong sexual double standard, rapid economic growth followed by escalation of earning differentials, and synergy of sex industry and growing international tourism industry. However, Thai sex industry is a composite of multifarious business styles and people, and therefore macro-level analysis focusing on the nationwide socioeconomic situation does not always give an optimal understanding of one particular segment of the industry, such as Bangkok's go-go bars.

It seems clear that bar girl - customer relationship is not always pure economic. Social reality of bar girls and their customers is not as simple as conventional image of 'prostitution,' and conditioned by various motives and desires of the party concerned. Given author's intensive and microscopic observation on Bangkok's go-go bars, this paper presents some important trends and characteristics of cultural, social and economic change in Thailand, that is reflected in human relations among men and women in the bar scene. The belief list of the points is as follows: 1. Selfish desire for consumption, 2. Longing for modernity and urbanity, 3. Changing sexual standard, 4. Diffusion of the Internet and mobile phone, 5. International division of reproductive labor, 6. Corruption of traditional gender role in developed countries.

1. はじめに

タイにおいては売買春を主とするセックスセクターは経済的にも社会的にも巨大な現象である。

P. Pongpaichit ら [1998] の推定によれば、1993 年から 1995 年の間に売春は年間 1,000 億バーツ¹⁾ に達する経済効果を生んだが、これは当時のタイの GNP の 2.78% に相当するという。戦後の

* 東京大学大学院

歴史を通じてタイのセックス産業が拡大の一途を辿ってきた理由は、一般的にはタイにおける伝統的な文化・社会風土及び国家を取り巻く経済状況の変化に帰せられてきた。タイの売買春の隆盛を説明しようとする従来の試みは主にそうしたマクロ的な視点からのものであり、一定の成功を収めてきたといってよい。しかし、過去のマクロ的な議論の多くは売買春を一括して論じており、業態や当事者達の動機・行動の多様性を考慮した分析は少なかった。筆者としては、ミクロな視点から見れば、当事者たちの多様な経験を均質なものとして捉える議論は、粗略に過ぎる部分があることを指摘したい。本稿は、多様化が著しいタイにおけるセックス産業のなかでもゴーゴーバーという業態セグメントのみに焦点を絞り、そこに集う当事者たちの視点から、その隆盛の背景となるような時代的なマクロ状況を汲み取っていくことを試みる。真摯なミクロ研究というものは、決してマクロの環境的諸条件を無視するものではなく、むしろマクロ的な状況把握の後押しをするものである。本稿が、フィールド調査²⁾に根ざした微視的な分析を通じて、ミクロとマクロを接合する視角を提示し得ていれば幸いである。

2. タイにおける売買春の隆盛の背景

少なくとも第二次大戦後の歴史を通じて、タイ国内における文化・社会的な土壤が、若い女性を売春へと向かわせやすい環境を形成していたことは多くの研究者が指摘している。更に、1970年代以降の急速な経済発展は、売買春の収縮には寄与せず、むしろ売春者・買春者双方の側において、取引に参入するインセンティブを強化する結果となつた。Boonchalaksi and Guest [1994] は、タイのセックスセクターが今日の隆盛を見るに至った背景には、以下の3つの文化・社会・経済的な環境要因が主としてあるという。

(1) 伝統的な性的規範

タイ国内において女性のセックス産業への参入を後押しする文化・社会的要因としては、いわゆる性的二重基準が強固に存在するということが、真っ先に挙げられよう。男性においては婚姻前に性交渉を持つことは悪癖と見なされず、むしろ奨励さえされる風潮があるのに対し、女性の場合は恥であり体面を失うこととされているという指摘は多い [Bumroongsook 1995; Ford and Kittisuksathit 1996; Knodel et al. 1999]。文化・社会的規範上<良い>とされる女性像に貞節さが必須であり婚姻前・婚姻外の性交渉が許されない以上、その役割は特定少数の女性が引き受けざるを得ない。かくして、タイ社会は（他の家父長制的な社会と同様に）、規範からはずれた存在として貶められ、徵づけられた売春婦を構造的に必要としてきたのである³⁾。

こうしたジェンダー間の不均衡な関係は、仏教的な世界観が女性の文化・宗教的な劣位性や社会的な立場の弱さの基盤となっていることにもよっているという [Reynolds 1979; Keyes 1984]。更に、Thitsa [1980] や Kirsch [1975; 1982] らが主張するところによれば、仏教に基づく女性蔑視が、賤業としての売春へ女性を追いやっている。すなわち、「仏教により女性の体と精神には低い価値があてがわれ、女性は既に売春へ向かうのに充分なほど貶められているのだ [Thitsa 1980: 23]」。こうした<仏教的>価値観によれば、女性に生まれたことは前世における功徳が足りなかつたことを意味し、従ってより世俗的な存在である「女性が罪を犯したとしても、それは分かっていたこと」であるという [Kirsch 1975: 185]。

(2) 経済発展、所得格差の拡大と伝統的な女性の役割

戦後のタイ経済の発展過程において、近代的産業の立地が集中する大都市（バンコク）及びその

周辺と地方の農村地域における収入格差が拡大し、これが地方からバンコクへの経済移民を生む圧力につながった。常に最も中心的な労働力の吸収先であった農業が、新規の開拓による耕地面積の拡大が行き詰まつたために、1980年代の後半になって、未だ増大を続ける労働人口を吸収しきれなくなったという事実も、農村から都市への人口流入の背景にある [原田・井野 1998]。また、同じ農村地域であっても地方によって経済状況は相当に異なっており、特に貧しいとされる北部・東北部からバンコクへの出稼ぎや移民が目立つ。こうした状況を反映して、一般にバンコクにおける売春婦の出身地は北部及び東北部が多い。地方からの出稼ぎ女性の多くは、高等教育はおろか中等教育さえ満足に受けていないことがある。そのためには職業選択の幅が限られるので、ハイリスクではあっても高収入を得られる可能性のある売春に向かいがちになるのである。

タイの若い女性が売春に参入する背後にある要因のひとつとして、娘が両親を支えなければいけないという強い観念の存在がつとに指摘されてきた [ポンパイチット 1990; Boonchalaksi and Guest 1994]。背景には、タイ農村における基本的な女性の役割がある。一般的な理解によれば、通俗的な仏教思想を貫く男性中心主義は必ずしも生活全般におけるタイの女性の地位の低さに繋がっているわけではないという。女性が積極的に経済活動に従事し、また家計を支える役割を担っているという事例がしばしば見られることから、一般にタイの女性は経済的な文脈においては相応の高い地位を与えられているというのである [Hanks and Hanks 1963; Potter 1977]。ただし、経済活動においてタイ人女性が見せる活発さは、その役割が社会的・政治的な領域から排除され、家庭的・経済的ものに限定されてきたことの裏返しでもある [Keyes 1984; Kirsch 1982]。また宗教的な平面に目を向けると、制度的な要因により出家によ

る宗教上の活動を禁じられた女性は、在家として出家集団（サンガ）を支え、また母として息子を出家させる以外には、仏教の制度的な実践に参与する道も功德を積むための方策もない。こうした文化的な背景において、タイの農村部では、娘に対して社会的な地位を獲得するという期待が掛けられることはなく、主に仏教的な価値観においては重きが置かれないとされる経済的側面において両親への貢献が求められるという [Kirsch 1982]。このような期待を担った農村部の女性たちにとっては、現金収入確保のために都市へと出稼ぎに向かうことは半ば自然の成り行きとなる。売春という苦渋の選択は、多かれ少なかれそうした出稼ぎへの文化社会的な圧力の下でなされていくのである。

(3) 発展する国際観光産業とセックス産業の結び付き

タイを訪れる観光客の数は1970年代以降急増し、タイは観光収入の面から見て世界で20位（2000年現在）という観光大国へと成長を遂げた [WTO 2002]。かつては、タイ政府や航空会社、ツアーオペレーターなどの観光産業による観光客誘致策は主に男性客をターゲットとして行われてきたのだが、そこで賞揚されるタイの魅力は、往々にしてタイ女性の美しさやエキゾチックさ、さらにはホスピタリティの豊かさや従順さといったものであることが少なくなく、ツアーオペレーターによる宣伝文句の中には、あからさまにタイ女性を男性の性的欲望の対象として提示する場合もあった [トゥルン 1993; リー 1994]。こうした観光促進策がどの程度の影響力を持つのかは不明だが、タイを訪れる観光客の比率を見ると、圧倒的に男性が多いのは事実である。

セックスツーリストの送り出し側となる欧米や日本のツアーオペレーターたちも、こうした状況を利用して男性旅行者の性的欲望や好奇心を煽るような宣伝を繰り広げ、また買春を組み込んだパッ

ケージッターを企画した。1970年代から1980年代にかけて、NGOなどによる国際的な批判が噴出するまで、買春パッケージッターは隆盛を極めた。日本人男性はそのような業者の上得意であり、企業の社員旅行なども含めて、数え切れないほどの日本人男性が買春ツアーに参加した。現在では、大型バスでマッサージパーラーに乗り付けるようなあからさまな形態のツアーは影を潜めたが、出張などに伴う買春接待は、タイに関わるビジネスを行う日系企業に多く見られる慣習として今日に至るという〔日下 2000〕。

3. タイのセックス産業とゴーゴーバー

タイのセックス産業に関して特筆すべき点は、その規模のみならず、業態が非常に多岐に富んでいるということである。ここでは、本稿が取り上げるゴーゴーバーという業態がどのようなものであるかを素描しておく。

タイで最もありふれた売春の提供形態である伝統的な置屋やマッサージパーラーとは異なり、ゴーゴーバーは管理売春の場と機会を提供するものではない。タイにおいては、カラオケクラブ、ゴーゴーバー、ビアバーなど、日本で〈水商売〉と言われるような業態における女性ホステスは、店での接客サービスだけではなく、売春を含む性的サービスをオプション的なものとして提供している場合が多い。ただし、こうした施設で働く女性従業員は、店との雇用関係においてはダンサーであったり接客ホステスであったりで、必ずしも〈100%売春婦として〉働いているというわけではないのが特徴である。従ってこうした業種では、男性客と女性セックスワーカーとの関係は雇用主の管理を離れて様々な形を取りうる。また、これらの業態の場合、女性セックスワーカーたちのほとんどは、強制という形ではなく、他の職業との比較選択の上で現職に就いている。

バンコク中心部のゴーゴーバー⁴⁾は基本的には

アルコール飲料（ソフトドリンクも注文可）を提供するアメリカン・スタイルのバーである。ロック・ダンス系のポピュラー音楽を大音量で流し、全体的に照明の明度を落とした中でミラーボールや原色の投光が揺れる様はいわゆるディスコのそれに近い。ゴーゴーバーがゴーゴーバーたる所以は、店の中央部に大きなステージを持ち、その上で水着（もしくは全裸やトップレス）の女性が音楽に合わせて体をくねらせているところにある。ゴーゴーバーを訪れた客は、ステージを取り巻く形で設置された丸椅子や壁際のソファに座って、ダンサーの姿を眺めることになる。

ほとんどのゴーゴーバーは入場料や席料を取らず、一杯毎に注文されるドリンクの料金（80—120バーツの範囲）と、客が気に入った女性ダンサーを店外に連れ出す際の〈連れ出し料（bar fine, 'pay bar' もしくは kaa baa などとも言われる）〉を主な収入源としている。ゴーゴーバーの客は、ダンサーであれウェイトレスであれ、気に入った女性従業員を店外に連れ出すことができる。客がどのバーガールを連れ出すか（または連れ出さないか）、また店外で連れ出したバーガールと何をするかなどは、基本的に客とバーガールの間の直接交渉に任されている。連れ出し料を払って店を出た後に何をするかは、男性客とバーガール本人との合意の下に決定される。多くの場合は客の宿泊先に同伴して性交渉を持つということになるのだが、単に食事を共にしたり、バーガールの案内でディスコなどに繰り出したりなど、様々なケースがある。ときには連れ出し料を払うのみで当のバーガールに同伴を要求しない客もいる。客とバーガールが〈売買春〉を行うことに同意した場合の支払額も、やはり両者の交渉による（条件により1,000—3,000バーツ程度）。

4. バーガールー男性客関係の諸相

バンコクのゴーゴーバーで働く女性の大半は地

方出身者である。中でも、一般に所得水準が低いとされる東北部の農村出身というケースが非常に多い。こうした背景もあり、大抵のバーガールは多かれ少なかれ収入の良さに惹かれてゴーゴーバーでの仕事を選んでいる。ここで注意しておきたいのは、バーガールたちの高収入への志向は一般に、日々の食事に事欠くような貧困から脱出する為のやむにやまれぬ選択でもなければ、家族（特に両親）を経済的に支えるという自己犠牲の意識のみに由来するものでもないということである。筆者が行った調査が示唆する限りでは、一般にバンコク中心部のゴーゴーバーで働く女性たちの最も主要な動機は、ある意味で利己的な金銭面でのものであると考えて良い。

一方、ゴーゴーバーの客となる欧米人や日本人男性たちに目を移すと、自国に比べて比較的安価に買春が行えるということが、彼らがゴーゴーバーにやってくる大きな要因となっていることは疑いないのだが、それが関心の全てであるというケースはむしろ希であるということに注意したい。ゴーゴーバーとは文字通りバーなのであって、前章で描き出したとおり、それ自体が売春サービスを保証するものではない。バンコクには、例えばマッサージパーラーのようにより直接的な形で売買春の取り持ちが行われている場所があり、しかもそうしたオプションの方がバーガール相手の買春よりも（総出費額で考えれば）一般に安価であり、またサービスの内容や質も保証されている。そのような状況のなかでゴーゴーバーへ出向くことを選択する動機は、必ずしも性交渉と直接的に関連することばかりとは言えないことが多い。買春以外の関心というのは、例えば多数の裸体の女性を眺めながら酒を飲む場という非日常的な空間に足を踏み入れることによって得られる楽しみや開放感であったり、バーガールとの間に会話を通じたコミュニケーションを持つことであったりなど、様々であろう。特にバーガールとの間にある種の

触れ合いや友愛を求める傾向が、ゴーゴーバーを訪れる男性客の間には少なからず見られ、彼らの中にはバーガールたちとの間に恋愛的とも言うべき面を持つ関係を構築していく者もある。

バーガールと男性客の＜恋愛＞と言ってしまうと三文小説のような（男性側にとっての）御都合主義の解釈に過ぎないと批判されるかもしれない。しかしながら、タイを舞台とするセックスツーリズムの場合には、売春婦・男性客関係の性格が経済的なものなのか社会・心理的なものなのかという境界が曖昧なことが多い。E. Cohen [1996] や C. Odzer [1990; 1994] らが強調するように、その関係はその場限りの経済取引という型どおりの売買春にとどまらず、しばしばある種の友人関係や恋愛関係のような様相を呈し、長期化していくことがある。また、取引当事者の一方または双方に、それが売買春（もしくはそれに類する経済的取引）であるという意識がない場合すら散見される [e.g. Gunter 1998]。ゴーゴーバーでの出会いに始まるバーガール-男性客関係は、少なからぬ場合において、そのような曖昧な関係に発展していく可能性を秘めいているのである。

筆者によるバンコクでのフィールドワークにおいても、バーガール・男性客の双方において相手への感情的愛着はしばしばその関係のあり方を決定する無視できない要因となるという事実は追認することができた。バーガールにしても男性客にしても、ゴーゴーバーという場にやってくる動機の背景にあるのは、必ずしも金銭と性的サービスの交換というだけでなく、その他の楽しみやコミュニケーションを通じた親密な関係の快さといった、必ずしも経済の論理だけでは割り切れない関心なのである。

5. ゴーゴーバーから展望するタイ社会への現代性と国際性の侵入

少なくとも、ゴーゴーバーという業態セグメン

トに焦点を絞って観察したとき、第2章で紹介したようなタイにおける売春の隆盛に関する一般的な説明のみでは、我々の目の前にある現実の説明としては物足りないことは明らかに思える。タイにおけるセックスセクターの発展の背景には、多くの研究者が強調する以上に複雑なマクロ的な環境要因があるのであり、しかもそれらが細分化された業態セグメントの各々に平等に働いているというわけでもない。従って、<タイにおける売買春>というように観察規模を大きく取ることは、一面でセックスセクターを取り巻く社会経済環境の俯瞰的な見取り図を提供する反面、その内部における異なるセグメント間の偏差を平準化してしまう傾向を生みやすいことは常に意識されておかなければならない。

フィールドワークにおける微視的な観察の産物として得られた、当事者たちの関心や動機の複雑なあり方への理解は、ゴーゴーバーを舞台として展開されるバーガール-男性客間における社会・経済関係を読み解くための手がかりとなる。加えて、そのようなフィールド志向のミクロな視点からの考察は、結果として、従来のタイにおけるセックスセクターを概観するようなマクロ的研究が突っ込んで分析することができなかった、観光志向セグメントの隆盛の背景にある特有の環境要因をもはっきりと浮き彫りにするのである。本章では、前章で提示された当事者たちの関心の様相から読み取ることのできる、現在のタイを取り巻く文化・社会・経済的なマクロ状況について考察を試みる。今日のタイ社会は急速な変化のただ中にあり、また好むと好まざるとに関わらず、グローバルな政治経済のメカニズムに組み込まれている。そのような変化や国際化の動きは決してタイ社会の全体で斉一的に進行しているのではなく、むしろある特定の部分から始まる侵食の過程というイメージで捉えた方が的確であろう。本章では、タイ社会において局部的に、しかし確実に広がりながら進

行している変容の過程を、ゴーゴーバーという窓からスナップする。

(1) 消費への利己的な欲望

前章では、バーガールたちがゴーゴーバーで働く（働き続ける）動機の多様な可能性が描かれた。そこで明らかに示されているのは、タイにおける売春に関するマクロ的研究の多くが提示してきた、家族に対しての義務意識から自分を犠牲にする売春婦というイメージと、バーガールたちの現実が必ずしも合致しないということである。携帯電話に象徴される現代的な消費財への欲望は、多くの場合バーガールたちが仕事を続ける上での主要な動因となっている。バーガール（もしくは売春婦一般）の場合に限らず、地方の農村からバンコクに職を求めてやって来る若い世代のタイ人たちは、必ずしも故郷と決別している訳ではない。少なからぬ場合において実家の両親へ送金を行い、ソンクラーンなどでまとまった休みが取れれば実家へ帰郷する。特に幼い子供を両親の元に預けて単身バンコクにやってきているバーガールの場合は、故郷の家族との絆は一層強いものとなるだろう。出稼ぎを通じてある程度の現金収入の基盤を確保した者たちは、一時帰郷の際には当然のように最新の家電製品を持ち帰ったり、金のアクセサリーを身につけたりすることを通じて、そうした物財に縁遠い農民たちに強烈な印象を植え付ける。また、バンコクや外国への出稼ぎにおいて大きな成功を収めた売春婦（やバーガール）たちは往々にして故郷に多くの農民たちにはとても手の届かないコンクリート造りの家を建てることを好むが、意図する意図しないに関わらず、それは結果的に自己の成功を誇示することになっている。このような帰郷者たちの姿にみる成功体験が、地方の農民たちの物質的欲望を刺激してさらなる出稼ぎ者を生み出す過程を、鈴木則之 [1994] は<欲望の循環>と呼び、農民たちの間に見られる物財への

執着やフォーディズム的な消費行動への強力な志向を強調している [鈴木 1993]。バーガールたちの場合もこの<欲望の循環>過程にはまりこみ、必ずしも伝統的なジェンダー・ロールの意識に基づく家族への経済的貢献のみがその動機を形成しているのではなく、多かれ少なかれこのような極めて利己的な消費欲求に突き動かされていることは否定しがたい。

(2) 女性出稼ぎ労働者たちと<現代性>

金銭的・物質的な志向がバーガールたちの関心の底流にあることは確かだが、バーガールたちの関心の多様さは、利己的な欲望というものが決して物財の購入と所有・消費というだけにとどまらないということを雄弁に語っている。若年タイ人女性による地方農村から都市部への移動の動因が、従来強調されてきたような金銭的なものだけではなく、彼女たちが都会生活のうちに（農村の生活との対比において）思い描く華やかさや現代性 (*thansamay*)⁵⁾への憧憬が大きな要因となってきているということは、既に指摘されている [Mills 1999]。帰郷した出稼ぎ者によってもたらされる様々な耐久消費財は、単に家事労働の簡素化や居住環境の改善といった物理的な利益をもたらすだけではなく、生活スタイルそのものの変革も意味している。昭和30年代の日本においていわゆる三種の神器といわれた冷蔵庫・洗濯機・自家用車は、現代のタイの農村においても近代的な生活スタイルの象徴と見なされる。その所有はともにおさず、生活スタイルの先進性においても差別化を図ることになるのである。そのような先進的な生活スタイルのモデルは、基本的には発達したマスメディアによって提供される。近年急速に普及したテレビのブラウン管に映し出される富裕階層の生活や、綿密なマーケティングのもとに視聴者の消費意識をあおろうとする各種コマーシャル、更に若い女性の場合であれば流行の服や髪型

を紹介するファッション雑誌などが描き出す現代的な若者の肖像に、多くの若者はあこがれる。ところが、そのような情報の流通システムの発達とは裏腹に、バンコクと地方農村における情報蓄積の格差は拡大する一方である。したがってバンコクでの消費生活こそが先進的な生活スタイルを体現していると捉えられ、それに触れたいという思いが、特に若い女性たちのバンコクへの旅立ちを後押しする。

地方の女性労働者と<近代性（現代性）>に関しては、平井京之助 [1995; 2001] がタイ北部の女性工場労働者のケースを取り上げて論じている。平井が調査を行った日系の工場の工員たちは近隣の農村から通ってくる18歳から25歳の女性が主であったが、彼女たちは村落内部の生活空間から離れ、かつ現金収入を得ることを通じて、だんだんと生活全般における価値意識を変容させていくという。それは強力な近代化・現代化への志向 (*thansamay*へのあこがれ) に支えられており、最新の耐久消費財の購入⁶⁾や、センスの良い（と思われる）化粧品や衣服を購入して身を飾ることなどに大きな価値がおかれ、そのような行動様式自体が *thansamay* を体現していることだと捉えられる。こうした現代性というものの捉え方は、バーガールたちの場合においても同様に観察される。さらに、スクムビットやシーロムといった名の通った不夜城を舞台として、華やかにきらめく色とりどりの照明と欧米のポップミュージックに彩られた職場環境は、ある意味で現代性の象徴とも言える。彼女たちが捉える現代性は、一面において欧米や日本のテクノロジーや消費文化に体現されている。従ってマスメディアを通じてではなく欧米人や日本人の男性と直接接触し時間を共にすることを通じてその価値観に触れるることは（ただし必ずしも真似ようとするわけではない）、タイの伝統的な生活スタイルと欧米・日本の<先進的な>それとの対比という図式の中では、伝統に

がんじがらめとなった女性たちから自らを差別化する上で、非常に効果的なやり方となる。また欧米人・日本人の（男性として魅力的な）ボーイフレンドを持つこと自体が＜先進的な＞ことであり、経済的な文脈を離れてもあこがれの対象となりうるということもあろう。

これまでの議論で既に示唆されているが、バーガールという職業に求められる努力の方向性が、彼女たちの現代性への志向と少なからぬ部分で平行しているということも忘れてはならない。平井 [1995] が描き出す北タイの女性工場労働者達は、仕事の内容そのものは自分たちの欲望とは全く関わりのないものとして捉えており、結果として得られる現金収入とその現代的な消費の仕方以外にはほとんど関心が向かないという。これは組立ラインにおける単純作業の繰り返しという彼女たちの職務内容にもよっているが、バーガールの場合には全く事情が異なる。すなわち、最新のあか抜けた仕方で装うこと、外国人の恋人を持つこと、携帯電話を購入すること、ディスコやプールバーなどで夜遊びをすることが、仕事上のパフォーマンス向上に直結しているのである。このような、仕事内容そのもののうちに現代性を内包する職業というのは、（それがセックスワークでなければ）現代性にあこがれてバンコクにやってきた若い女性にとっては理想的なものであろう。なかでも享楽的な価値観を持つ一部の女性にとっては、それが道徳的に好ましくないという点を除けば、バーガールという職業は少なくとも一時的なものとしては（収入以外の点でも）魅力的な側面を持っているのである。

(3) 若年層における性的規範の変容

若いタイ人女性たちがバーガールなど参入退出の自由な形態のセックスワークに就くことを選択する背景には、タイ人若年層に関して近年報告されている性的規範の変容があることを無視しては

ならない。1980年から90年代にかけての急速な社会変化は、若いタイ人達のカジュアルな性的関係への抵抗感を一層薄めてきたように見える。バンコクのゴーゴーバーで働く女性の大多数は地方の低所得層（特に農家）出身者であるが、女性の性的な行動や決断を男性の支配下におこうとする伝統的なジェンダー秩序は、バンコクのような都市部のみならず地方においても弱まりつつあるようだ。例えば道信良子 [2001] はタイ北部の若年女性工場労働者たちの間で婚前交渉への抵抗感が薄くなっていることを指摘する。道信によれば、その背景にはテレビや雑誌などの中に現れる現代的な女性像へのあこがれ、そして西洋的なロマンティックラブ・イデオロギーが輸入変容された＜独占的愛＞の思想の普及があるという。

若い女性工場労働者が自分たちの婚前性交渉を正当化するひとつの概念であり、自己の性規範を構築するうえで最も重要な概念に、「独占的愛」(*rak diaw jai diaw*) の概念がある。「独占的愛」(*rak diaw jai diaw*) とは、語義通りには「一人の相手に忠実な愛を寄せる」とあるが、「ロマンティック・ラブ」(*rak romeentik*) の思想を含み、さらには互いの性的関係の「独占性」を強調する概念である [道信 2001: 86]。

道信によれば、＜独占的愛＞の思想は女性のみならず男性にも性的放縱を許さないという点で男女対等なものであり、また互いへの誠実な愛情があれば、一対一関係であるという限りにおいて婚前交渉を正当化するものとなる。こういった傾向が見られるのは北タイに限らず、ゴーゴーバーで働く女性の出身地としてもっとも多い東北地方の農村においても、婚前交渉の容認といった性的規範の緩和が見られるという [Lyttleton 1999]。

ただし、近年における性的規範の変容は、必ずしも觀念的なロマンティックラブ・イデオロギーの移入や婚前交渉の容認といった形でのみ現れる

のではない。ときには、そうした性的な部分での意識の変化が、その他生活全般における価値観と結びつくことによって、伝統的な規範からよりかけ離れた行動に結びつくこともある。例えば、女性の婚前交渉への抵抗感の減少が若者の間にはびこる拝金的かつ享楽的な価値観の蔓延と結びついた結果は、近年学生（特に大学生）によるパートタイム的な売春の増大という形で表出し、すでに社会問題化している。Bangkok Post [1999a; 1999b; 2001 etc.] の記事によれば、女子学生による売春は日本における援助交際と同じように個人対個人の形で行われ、高額の報酬を受け取ることが多い。一般に、こうした女子学生による売春は、生活苦のためというよりは、より快適な生活（贅沢品の購入など）への欲望が主な動機となって行われるという。女性の売春に対する社会的な忌避意識の弱まりについては、外国人やタイ人富裕層相手の売春を経験して郷里に戻った女性（というよりもむしろその家族）が誇示する物質的豊かさが、一般的に売春の価値を認める考え方につながる場合があるといった指摘が頻繁になされている [ポンパイチット 1990 etc.]。こうした部分も確かにあるのだろうが、女性の性的身体をモノ化・商品化する視線及びそれを容認する価値意識は、多くの女性には関わりのない売買春のあり方よりも、むしろ「美人コンテスト、職場、寺院、家庭、ショッピングモールなどの場」において形作られ、内面化されてきた [Van Esterik 2000: 163] と考えた方がよい。かつて強調されたような、家族のために自分を犠牲にして売春婦となるというよりは自分自身の消費的欲求を満たすために売春を行う女性たちが今日増加しつつあるよう見えるのは、こうした文脈において理解されなければならないだろう。

道信が描き出す＜独占的愛＞の思想は、婚前交渉に限らず伝統的な価値規範においては不道德とされた性関係のあり方を容認するという意識の存

在を示唆している。したがって＜独占的愛＞に重きを置く価値意識は、バーガールたちが男性客と排他的な恋人関係（擬似的なものであれ）を形成することを通じて自分たちの行動を正当化することの根拠ともなろう。伝統的な置屋に代表されるタイ人相手の管理売春のセッティングにおいては、男性客と排他的な恋愛関係を発展させる可能性は少ない。ところが、これがバーガール（外国人相手のフリーの売春婦や日本人向けカラオケクラブのホステスも同様）になると、第一には接客においての自由度が高いこと、第二には顧客が必ずしもタイ的な価値観を共有しない外国人であること、という二点において、ステディな関係に発展する可能性が遙かに高くなる。伝統的な性的規範においては、あからさまな売春は言うに及ばず、どこかの馬の骨とも分からぬ外国人の＜ボーイフレンド＞との間に婚前交渉を持つことは好ましいことではないし、伝統的な共同体の中にいる限りは後ろ指さされることを免れないかもしれない。しかし、若者の間で共有されつつある＜独占的愛＞の価値観においては、外国人＜ボーイフレンド＞との関係は（それが恋愛感情に支えられた排他的な恋人関係であるという前提において）許容され得るものとなる。バンコクにおけるバーガールの多くは故郷の村落共同体から離れて、生活・就業環境や年齢を近くする者たちを中心として形成されるネットワークの中に生きているので、仮に＜独占的愛＞の思想がタイ人一般に受け入れられるようなものではなくとも、少なくとも自分の周囲の人間たちがそれを共有しているのであれば、自己の行動を規定する上で充分に強力な倫理的な拠り所となるのである。

(4) インターネット・携帯電話の普及と流通する情報量の増大

タイのセックスセクターに関する情報が、雑誌や書籍、さらにはインターネットを媒介として大

量に流通するようになったのは比較的最近のことだ。日本においては、1990年代半ば以降の情報の氾濫が、タイにおける買春行動の多様化に拍車をかけたように見える。特に、1990年代後半になって各種買春マニュアル（雑誌の特集や書籍）が登場し、インターネット上でリアルタイムに流れる情報の量が爆発的に増えた結果、エージェントに頼らず個人で探索的に買春行動を起こすことが容易になった。ゴーゴーバーやマッサージパーラーに関する解説・体験情報を提供するウェブサイトが幾つも開設され、人気を博している。またネット上にはバンコクのホテルにおける女性連れ込み料（ジョイナー・フィー）に関する情報サイトなども存在し、男性買春者にとって、自らの行動をサポートする情報は、量的にも質的にも事欠かない。インターネット上におけるタイのセックスセクターに関する情報の蓄積は英語を媒体とするものが遙かに多く、その歴史は1990年代半ばにさかのぼるようだ。さまざまなソースからの情報により、タイ＝買春天国という認識が一般的になると共に、学生などを含む多様な層の人々が（少なくとも部分的には）買春目的でタイを訪れるようになった。

世界的なインターネット普及の趨勢は、セックスセクターに関する情報がタイを訪れる外国人たちに膾炙する要因となるだけでなく、その情報流通における即時性・双方向性によって、バーガールと男性客との関係のあり方にも大きな影響を与えている。国際郵便による＜文通＞のスタイルは20世紀の終わりとともに急速に廃れ、現在ではより手軽で効率のよいコミュニケーション手段を活用することにより、遠く外国にいる顧客との関係継続が遙かに容易になっている。自宅に自分用のPCを持つバーガールはほとんどいないものの、多くはHotmailなどの無料の電子メール・アカウントを持ち、国外にいる顧客たちと連絡を保つのに活用している。ゴーゴーバーの密集地帯である

スクムビット地区やパッポン通り周辺には比較的安価なインターネットカフェが林立しているので、バーガールたちは全く苦労することなくインターネットにアクセスできる。かつての＜文通＞時代に活躍した代書屋的な存在は未だに健在であり、英語が得意でないバーガールに代わって顧客へのラブレターや援助を要請する文章を書いたり、電子メールの使い方やウェブブラウジングの仕方を教授したりするなど、ビジネスの幅を広げている。時にはゴーゴーバーの近くに立地するインターネットカフェの従業員がこうした役割を担うこともある。

同様に、ここ数年で急激に安価になった携帯電話を所有することによって、外国人男性が電話でバーガールに連絡を取ることが気軽にできるようになった。かつては多くのアパートメントの電話がオペレーター交換式だったため、タイ語ができる外国人にとって、バーガールに電話で連絡を取ることはしばしば困難を伴った。現在では自動交換式の電話が増えているが、時に同室者が電話に出たためにうまく話が通じないといったトラブルは後を絶たない。また、頻繁に住居を移るバーガールは多いが、携帯電話を所有することにより、仮に引っ越しをしても電話連絡先を変えずに保持できるようになった。このような情報通信インフラの急速な改善により、バーガールと顧客が互いに関係を保つまでの距離の障害はかつてに比べてずいぶん小さくなった。両者の関係が長期化する傾向が明らかになっている背景には、こうした事情もあると考えられる。

(5) ケア労働⁷⁾の越境化（国際化）と階層化

タイ社会を取り巻き翻弄しているグローバルな変化の潮流は、情報通信の世界においてのみ見られるわけではない。タイの国内経済においては米欧日の多国籍企業の存在感が飛躍的に増大している。特に第二次産業は、グローバル市場を相手に

する欧米や日本の製造業の世界戦略のもとで国際的な労働市場に組み込まれ、タイ以外の国々における政治経済状況に否応なく影響されるようになっている。このような生産労働における国際分業の進展は早くから注目を浴びていたが、特にタイのような発展途上国の女性労働者を取り上げて考える場合、家事労働に代表されるケア労働における同種の国際分業体制⁸⁾が厳然として存在していることに注意しなければならない。

アメリカ合衆国において、白人富裕階級の女性が有色人種の女性を雇って家事労働を任せることは奴隸制時代から連綿と続いてきた。E. N. Glenn [1992] はこれを<再生産労働の人種間分業 (racial division of reproductive labor)>と表現したが、R. S. Parrenas [パレーニャス 2002] はそれが国内的な現象としてのみではなく、東南アジアや中南米の発展途上国から非熟練女性労働者を輸入する形で進展していることを指摘し、<再生産労働の国際分業 (international division of reproductive labor)>として定位しなおした。Parrenas が調査をしたフィリピンの女性たちは、現在アメリカに限らず西欧諸国や香港・シンガポールなどのアジアの富裕国に出稼ぎに出て、メイドとして家事労働を請け負っている。タイの場合を例に取ると、国外への移住労働者のうちに占める女性の割合が1990年以降増加を続けているが、そのほとんどは、家政婦などのケア労働もしくはウェイトレスなど対面接客的な色彩が強いサービス労働に従事しているという [Angsuthanasombat 2001]。さらに、再生産労働の国際分業は、単なる家事労働の請負契約の平面にとどまらず、女性出稼ぎ労働者たちの生活世界における再生産労働が、彼女たちが実家に残した母親などによって分担されるという事実を通じて、資本主義世界システムにおける「中心 - 周辺構造にわたる労働力再生産労働の分業関係」[足立 1996: 144] としてその連鎖を広げている。

東南アジア人女性たちが外国への出稼ぎにおいて従事する労働が、家事労働だけに限らず病院における看護や売春など必ずしも家庭（もしくは労働力再生産労働分業関係としての<ハウスホールド> [足立 1996]）内部での再生産活動の代替とはみなせないような労働一般に及んでいることに注目すれば、Parrenas が強調する<再生産労働の国際分業>と同様の構図がケア労働一般に関してもあてはまる傾向にあることが見いだせる。1980年代に話題になったいわゆる<じゅぱゆきさん>など発展途上国のセックスワーカーたちの先進諸国への出稼ぎや、先進諸国で結婚相手に恵まれない男性たちが発展途上国から妻を娶ろうとする動きも、先進国におけるケア労働の担い手として東南アジア人の女性労働者が<輸入>されるようになりつつあるという一連の文脈において理解できる。

同様に、ゴーゴーバーを始めとする東南アジアにおける観光志向のセックスセクターの隆盛も、一面では先進国において自国の女性たちのみでは担いきれなくなったケア関連の労働分担が、東南アジアの女性たちに押しつけられた結果と考えることができる。その分担の仕組みを単純に図式化してしまえば、ホステス業・売春というケア労働における<日本人女性=高価格サービス ⇄ タイ人（東南アジア人）女性=低価格サービス>という国際分業の体制が構築されていると理解しても良い [cf. Leheny 1995]。ここには日本の製造業が安価な労働力を求めてタイに進出したのと同様の経済的含意があるが、そこで焦点となる商品が運搬不可能な対面接客的サービスであることが、事情をいさか異なるものとしている。先に概観したように、ケア労働における国際分業についてはこれまで主に、発展途上国の女性がメイドその他の形で先進諸国へと出稼ぎに行くという形で捉えられてきた [パレーニャス 2002; 梅澤 2001]。しかし一方、ケア労働の国際化においては、ケア

をする側ではなく受ける側が移動するというオプションも当然可能である。事実、筆者が調査中に話をした日本人男性セックスツーリストのなかには、まず日本のタイパブ等でタイ人女性によるサービスに触れ、後により安価・良質なサービスを求めてタイに通うようになったという者が何人かあった。1980年代における女性セックスワーカーの大規模流入に直面した日本を始めとする先進諸国は、東南アジア人女性の受け入れの門戸を極めて狭くしている。セックスワークの領域においては、こうして外国人のサービス提供者の可動性が制限されたため、結果的に需用者である男性側が移動しなければ国際分業が成り立ちにくくなっているのである。

(6) 先進諸国における伝統的なジェンダー秩序の崩壊

ゴーゴーバーを訪れる男性客は一般に、バーガールに対して殊更に優越意識を持つとする傾向、バーガールとの間に金銭を介さない関係を成立させることで自己の性的魅力やマッチョな男らしさを確認しようとする傾向を持つ。それは基本的には家父長制的な非対称的なジェンダー関係の幻想に由来するものだ。しかし、欧米や日本の男性がわざわざタイを訪れてまでバーガールたちと関係を持つとする背景には、世界を覆い尽くす強固な家父長制システムの存在というよりも、むしろそのあり方が揺らいでいるという社会的な現状があるようと思える。例えば Kruhse-Mount Burton [1995] は、オーストラリア人男性が東南アジアへのセックスツーリズムにはじめる背景に、家父長的なジェンダー秩序が急速に崩壊しつつあるオーストラリアの社会状況を見る。彼女によれば、オーストラリアの男性たちが東南アジアのセックスワーカーとの関係を持つとするのは、彼らが家族内部での家長としての権威を失いつつあることへの代償行為という側面もあるというのだ。

オーストラリアに限らず、現代の西欧人・日本人男性は、かつてのような家父長的な男らしさを發揮する場をだんだんと奪われつつある。東南アジアへのセックスツアーはそれが一時的であれ回復できる機会としてとらえられ、多くの男性客を引きつけるのである。

D. Leheny [1995] は、同様な文脈において、日本における女性の権利意識の高まりが男性たちを東南アジアへのセックスツーリズムに駆り立てていると論じる⁹⁾。自らの母国における社会生活の中で、男性たちはかつてのようにただ男性であるというだけの理由で女性に対して無条件に優位に立つことはできなくなってきた。例えば上野千鶴子 [1992; 1998] は、日本においては男女の性交渉に際して女性がかつてのように受動的でのみあろうとはしなくなったため、男性の心的負担が増していると指摘している。ヘテロ的な性交渉において男性がリードしなければならないという一般的な認識は、アダルトビデオや小説・マンガなどの各種ポルノの多勢で描かれている執拗なまでの男性の攻撃性と女性の受動性という図式に明らかに現れているが、それらは性的な経験の不足を理由に人をおとしめるような言説¹⁰⁾ や若年・青年男性向けの雑誌における〈上手なセックスのやり方〉といった特集記事などによっても再生産され続けている。金塚貞文 [1982] は、そのような脅迫意識の下にある男性にとっては、買春という行為は金銭の支払いを通じて女性の身体を物化するという意味で一種のマスターべーションであり、女性との関係形成におけるプレッシャーから逃れるための方策でもあると指摘する。

こうした文脈においては、ゴーゴーバーという場は、日本の男性たちに買春を通じた（性交渉の）相手の物化ではない、より巧妙なオプションを提供していると見なすことができる。バーガールとの（性交渉を含む）関係形成は、そのプロセスをうまくリードできないことによって自尊心が傷つけ

られる恐れが比較的少ないという意味で魅力的なものになるのである。そこでは、男性は敢えて相手の女性を物化する必要がない。彼らの認識においては、自分は日本人であるが故に絶対的な優位者であり、その限りにおいて相手に対して劣等感や圧迫感を持つ謂われはないからだ¹¹⁾。ゴーゴーバーにやってきた彼らが、機械的に性的サービスを買うことの方が支出総額という点で遙かに負担が少ないのでもかかわらず、バーガールたちをディスコに連れて行くことや携帯電話のような高価なプレゼントを買い与えることを通じて個人的な関係の構築を求めるという背景にはこうした事情もあるのだろう。男性客たちが割り増しの出費をしてまで敢えて単純な買春を避けるのは、彼らの求めるものが単に性交渉を通じた身体面での性的満足にとどまらないことを示している。このような男性側の意識が<独占的愛>の思想において自己を正当化しようとするバーガールたちの意識と呼応することが、バーガール・男性客関係に独特の色を添えるのである。

6. おわりに

今日のタイ社会は、多くの面で急速な変化の中にある。戦後の歴史を通じて、タイ政府は自国の産業と社会の近代化を推進し、また近代的な国民国家のイデオロギーのもとに、タイ国民としてのアイデンティティを国民に植え付けるよう画策してきた。しかしながら、現実における変化はそのような政策立案者たちの予想を遙かに超えて進展してきたようだ。例えば輸入代替産業から輸出産業へとフォーディズム的な大量生産システムの育成に励んできた近代的工業が未だ独り立ちできないうちに、観光を始めとするサービス産業の存在感がどんどん増しつつある。それをひとつの呼び水として、人・カネ・情報の国際的な交流がとめどなく進展している。近代的な有線通信網をついに整備するがないうちに無線通信への飛躍が

始まったという意味で、近年のタイにおける携帯電話の急速な普及は、タイ人たちが経験している社会・経済・文化的変化のスピードを象徴している。今やメールの送受信機能がついているのが当たり前となった携帯電話は、タイ人同士のコミュニケーションの形を変えつつあるだけではない。かつてはテレビや映画が担ってきた諸外国へ通じる覗き窓の役割をインラクティブな交信経路を提供する形で引き受けつつ、しかもどこへ行くにも常に持ち歩くべきものとして、人々の日常に密着しているのである。

本稿は、ゴーゴーバーに関わる当事者たちの動機や関係形成の諸相に注目した微視的な知見から、その場の隆盛を支えるマクロ的な背景を掘り起こしてきた。そこで指摘された事実は、タイのセックス産業を俯瞰する従来的な研究のスタイルにおいては注意が行き届かなかったような側面に関するものだ。例えば筆者はフィールドにおいて、バーガールたちの多くが携帯電話の購入と所有に強い執着を見せる 것을観察した。彼女たちのそうした消費性向のあり方には、従来の研究において強調してきたようなタイにおいて繁栄する売買春一般の背景とはいささか異なる、極めて今日的なマクロ環境要因が働いている。すなわち、バーガールたちによる携帯電話の購入は、一方では彼女たちの現代的な消費生活スタイルへの欲望に根ざしており、他方では彼女たちの活動がタイ社会が経験しつつある国際化と情報通信革命のまっただ中で展開されていることにも由来している。彼女たちは、単なる売春婦と客という関係を超えて外国人男性との間に国境を越えた男女の関係を紡いでいくなかで必然的に、携帯電話やインターネットといった最新の情報通信ツールへの依存という、今日の情報グローバル社会における標準的な行動様式を身につけているのである。筆者がフィールドで行ったこうした細々とした事実の観察は、單にゴーゴーバーという場の理解につながるのみで

はない。現代のタイ社会においては、裕福で教育水準が高いとされてきたごく一部の中産階層のみならず、地方の農民や工場労働者のような一般の人々の生活世界にも先鋭的な現代性と国際性が侵入しつつある。ゴーゴーバーの調査から見えてくるのは、そうした現代タイ社会の一断面なのである。

〔注〕

- 1) 2003年2月現在1バーツは約3円弱。
- 2) 本稿におけるゴーゴーバーに関する記述は主に、筆者が1998年から2001年にかけて国立チュラロンコン大学タイ研究修士課程に留学した際にバンコク中心部のスクムビット地区で行ったフィールド調査に依拠している。当該のフィールド調査には延べ1年以上の期間が費やされた。本調査の期間は1999年9月から2000年12月にかけてであったが、その前後には断続的な予備・補足調査が複数回にわたり行われた。主なデータ収集手法はゴーゴーバーを訪れることを通じた直接観察とバーガール及びその男性客たちへのインフォーマルインタビューであり、インフォーマントの数はデータベースに残しただけでも80人を超えた。
- 3) 一般に、男性が買春を行うことについての社会的な忌避感は少ない。
- 4) ゴーゴーバーの立地は、基本的にはバンコク中心部及び有名ビーチリゾートに付随した繁華街に限られている。欧米人や日本人などの外国人が客層のはとんどを占めている。
- 5) タイ語で言う *thansamay* を Mills は modernity との関連で捉え、多くの日本人研究者が「近代性」と訳している。しかしながら筆者の私見では、少なくともバーガールたちが地方からバンコクへとやってくる背景にあるものとしての *thansamay* へのあこがれという狭い文脈で考えた場合、それはむしろより刹那的なく「現代性」と捉えた方がニュアンス的にはしっくりくるように思われる。
- 6) ただし、女性工場労働者たちが冷蔵庫やテレビといった耐久消費財の購入に向かう背景には、女性は

家庭を守る存在であるといった、良き母を理想の女性像とする伝統的な価値意識があるという [平井 1995]。

- 7) ケア労働という概念に対しての広く共有される定義はないが、本稿では、主に他人の生活上における肉体的・精神的な福祉の維持や増進に関して対的なホスピタリティの発揮を通じて貢献する労働を指してケア労働と総称する。すなわち、家事労働、看護、カウンセリングなどがこれに含まれる。従って本稿で言うケア労働とは、Parrenas が「家事労働、高齢者・成人・若者へのケア、子供の社会化、家族紐帶の維持といったものがこれにあたる [パレニヤス 2002: 158]」という際の再生産労働と職種的には重複する部分が多いが、必ずしも「生産労働力を維持するために必要とされる労働 [パレニヤス 2002: 158]」であるとは限らない。売春を含むセックスワークは、必ずしも再生産労働とは見なせないかもしれないが、本稿における定義上は明らかにケア労働である。
- 8) 本稿ではゴーゴーバーという現象を中心に扱うため、ケア労働の越境化と階層化について、タイを含む東南アジア諸国と先進諸国との関係に焦点を当てて記述した。しかしながら、タイ国内一般に目を移すとそこにはより複雑な状況があることに留意されたい。富裕層の女性が家事労働から逃れるために貧困層の女性を雇用するのは一般的であり、こうしたケア労働の担い手の少なからぬ部分が北部タイの山岳民族やラオス、ミャンマー、カンボジアなど隣接諸国からの出稼ぎ女性となっているのが現実である（売春の場合においてはこうした傾向がより顕著に残っている）。
- 9) ただし Leheny [1995] は、国際社会における日本の経済的地位の向上および女性の社会的地位の向上を遠因として、女性による性的サービスの価格が国際的に見てきわめて高価になったという経済的側面を強調している。
- 10) 例えは「童貞」を恥ずかしいものと捉えるような言説である [cf. 渋谷 2000]。
- 11) ただし現実には、バーガールたちは男性客たちが持つこのような意識を逆手に取り、取引関係を自分に有利な形に導くよう戦略的に動いていることがしばしばである。

参考文献

- 足立眞理子 1996. 「市場とサブシステム・エコノミー」『贈与と市場の社会学（岩波講座現代社会学17）』 pp.131-154 東京：岩波書店。
- Angsuthanasombat, Kannika 2001. "Case study 4: Thailand," Christina Wille and Basia Passl, ed., *Female labour migration in South-East Asia: Change and continuity*, pp.171-223.
- Bangkok Post 1999a. "Young students find lure of the 'good life' irresistible," Bangkok Post, 5 September 1999,
- Bangkok Post 1999b. "What price student virtue?," Bangkok Post, 19 September 1999.
- Bangkok Post 2001. "More students selling sex for extra cash," Bangkok Post, 12 June 2001.
- Boonchalaksi, W. and Guest, P. 1994. *Prostitution in Thailand*, Bangkok: Mahidol University.
- Bumroongsook, Sumalee 1995. *Love and marriage: Mate selection in twentieth-century Central Thailand*, Bangkok: Chulalongkorn University Press.
- Cohen, Eric 1996. *Thai Tourism: Hill tribes, islands and open-ended prostitution*, Bangkok: White Lotus.
- Ford, N. and Kittisukhsathit, S. 1996. *Youth Sexuality: The Sexual Awareness, Lifestyles and Related Health Service Needs of Young, Single, Factory Workers in Thailand*, Bangkok: Mahidol University.
- Glenn, Evelyn Nakano 1992. "From servitude to service work: The historical continuities of women's paid and unpaid reproductive labor," *Signs*, vol.18(1), pp.1-44.
- Gunter, Armin 1998. "Sex tourism without sex tourists," Martin Oppermann, ed., *Sex tourism and prostitution: Aspects of leisure, recreation, and work*, pp.71-80, New York: Cognizant Communication.
- Hanks, Lucien and Hanks, Jane 1963. "Thailand: Equality between the sexes," B. Ward, ed., *Women in the New Asia*, Unesco: Paris.
- 原田泰・井野泰久 1998. 『タイ経済入門（第2版）』東京：日本評論社。
- 平井京之助 1995. 「家を化粧する：北部タイの女性工場労働者と消費」『民族学研究』vol.59(4) pp.366-387。
- 平井京之助 2001. 「北タイ女性労働者とタン・サマイ言説：「近代性」への民族誌的アプローチ」『国立民族学博物館研究報告』vol.26 pp.237-257。
- 金塚貞文 1982. 『オナニスムの秩序』東京：みすず書房。
- Keyes, Charles F. 1984. "Mother or mistress but never a monk," *American Ethnologist*, vol.11(2), pp.223-241.
- Kirsch, A. T. 1975. "Economy, polity and religion in Thailand," G. W. Skinner and A. T. Kirsch, ed., *Change and persistence in Thai society*, pp.172-196, Ithaca: Cornell University Press.
- Kirsch, A. T. 1982. "Buddhism, sex-roles and the Thai economy," P. V. Esterisk, ed., *Women of Southeast Asia*, Northern Illinois University, Center for Southeast Asian Studies.
- Knodel, J., Saengtienchai, C., Vanlandingham, M. and Lucas, R. 1999. "Sexuality, sexual experience, and the good spouse: Views of married Thai men and women," Peter A. Jackson and Nerida M. Cook, ed., *Genders and sexualities in modern Thailand*, pp.93-113, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Kruhse-MountBurton, Suzy 1995. "Sex tourism and traditional Australian male identity," *International tourism: Identity and change*, pp.192-204, London: Sage.
- 日下陽子 2000. 『タニヤの社会学』東京：めこん。
- リー、ウェンディ 1994 [1991]. 「セックス観光－東南アジアの売買春と国際観光産業」山本光子（訳）S. シン クレア・N. レッドクリフト（編）『ジェンダーと女性労働：その国際ケーススタディ』 pp.113-144 東京：柘植書房。
- Lyttleton, Chris 1999. "Changing the rules: Shifting bounds of adolescent sexuality in Northeastern Thailand," Peter A. Jackson and Nerida M. Cook, ed., *Genders and sexualities in modern Thailand*,

- pp.28-42, Chiang Mai: Silkworm Books.
- 道信良子 2001. 「性的規範の変容と HIV 感染リスク：北タイ女性工場労働者の事例から」『ジェンダー研究』 vol.4 pp.79-94。
- Mills, Mary B. 1999. *Thai women in the global labor force: Consuming desires, contested slaves*, New Brunswick, New Jersey and London: Rutgers University Press.
- Odzer, Cleo 1990. *Patpong prostitution: Its relationship to, and effect on, the position of women in Thai society*, Unpublished Ph. D thesis submitted to New School for Social Research.
- Odzer, Cleo 1994. *Patpong sisters: An American women's view of the Bangkok sex world*, New York: Arcade Publishing and Blue Moon Books.
- パレーニャス、L. S. 2002 [2000]. 「グローバリゼーションの使用人（サーパント）：ケア労働の国際移動」小ヶ谷千穂（訳）『現代思想』vol.30(7) pp.158-181。
- ポンパイチット、パスク 1990 [1982]. 『マッサージ・ガール：タイの経済開発と社会変化』東京：同文館。
- Phongpaichit, Pasuk, Piriayarangsan, Sungsidh and Treerat, Nualnoi 1998. *Guns, Girls, Gambling, Ganja: Thailand's illegal economy and public policy*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Podhisita, Chai 1985. *Peasant household strategies: A study of production and reproduction in a Northern Thai village*, Unpublished Ph. D. thesis submitted to University of Hawaii.
- Potter, Sulamith H. 1977. *Family life in a Northern Thai village*, Berkeley: University of California Press.
- Reynolds, C. J. 1979 [1977]. *A nineteenth century Thai Buddhist defense of polygamy and some remarks on the social history of women in Thailand: A paper presented for the 7th Conference of the International Association of Historians of Asia, Bangkok, 22-26 August 1977*, Bangkok: Chulalongkorn University Press.
- 渋谷知美 2000. 「『童貞』差別の歴史的考察：男の性的成熟に対する意味づけをめぐって」『木野評論』vol.31
- 鈴木則之 1993. 『第三世界におけるもうひとつの発展理論：タイ農村の危機と再生の可能性』東京：国際書院。
- 鈴木則之 1994. 「欲望の循環」小野沢正喜（編）『アジア読本・タイ』pp.255-260 東京：河出書房出版社。
- Thitsa, Khin 1980. *Providence and prostitution: Image and reality for women in Buddhist Thailand*, London: Change.
- トゥルン、タン・ダム 1993. 『壳春：性労働の社会構造と国際経済』東京：明石書店。
- 上野千鶴子 1992. 『増補〈私〉探しゲーム：欲望私民社会論』東京：筑摩書房。
- 上野千鶴子 1998. 『発情装置：エロスのシナリオ』東京：筑摩書房。
- 梅澤直樹 2001. 「「再生産労働」の越境化をめぐって」『経済のグローバリゼーションとジェンダー』 pp.73-97 東京：明石書店。
- Van Esterik, Penny 2000. *Materializing Thailand*, Oxford: Berg.
- WTO (World Tourism Organization), 2002 "WTO Tourism Statistics,"
<http://www.world-tourism.org>.